



FDの不易と流行

教育支援センター所長 高城 玲

「期せずしてではあるが、コロナ禍によってこれまでにないほどFDが活発化した一年でした」。昨年度参加した学外のFDフォーラムで、このような発言を何度か耳にしました。それまで当然と考えられていた面接(対面)授業が不可能となり、遠隔授業やハイブリッド型授業など、いかに組み立てて実践するのか、否応なく対応に迫られた激動の年でもありました。他方、昨年度の経験は、やむを得ず迫られた結果とは言え、授業を通して学生といかに向き合うべきかという、古くから続く根本的な問いを自己再帰的に捉える契機ともなったのではないのでしょうか。上記の発言は、これらを受けてのことでした。

FDという言葉自体が人口に膾炙するようになったのは、この20-30年あまりのことです。特に2008年に大学設置基準上「FDの義務」が制度化されて以降は、各大学で広く取り込まれただけでなく、内容が個別のトピックに細分化され、時々の背景に応じて中心的な重点も変化、深化を遂げてきたように思われます。

ここでは、大学教育の実践と開発を目的として日本で初めて設立された京都大学の高等教育研究開発推進センター(現在)が、1995年以降実施してきた大学教育研究フォーラム(2003年までは大学教育改革フォーラム)のテーマ変遷からその重点の変化を簡単に振り返ってみます。その初期においては、「大学教育をどうするか」「どのような人間の育成を目指すのか」「教養教育をどうするか」など、根本的で大きな問題設定が掲げられていました。それが、FDが義務化される頃には、「相互研修型FDの組織化」「FDの学内組織化」など

組織的に取り組むべきとされたFDの方向性が、同フォーラムのテーマにも反映されるようになります。その後、2013年頃からは、「主体的学び」「学びをどうデータ化し、どう利用するか」「高大接続」「評価の新しい形」「人工知能」「AI」「ニューノーマル」など個別の重点変化を示すキーワードが年次ごとに列挙されています。社会や時代の変化に応じて文部科学省などが重視する方向性や重点のトピックに関連づけられるものが増えていく状況が見て取れると言えます。

「象牙の塔」への批判を引き合いに出すまでもなく、こうした社会や時代の要請を考慮せず、教員や大学側の論理のみによって大学教育やFDを考えることはもはや許されません。しかし他方では、社会や時代の変化、文部科学省の要請の変化に応じて、その要件充足にのみ汲々として、上滑りの対応に終始してしまいかねない危険性を認識する必要もあるでしょう。

かつて、芭蕉が不易と流行について、変化しない本質的なものを追求することと、新味を求めて変化を重ねていくことが、「その基はひとつなり」と指摘したように、一方のみではなく、時期に応じた変化を重ねることの中で、地に足を付けて本質的なものを見失わずに追求し続けることが求められるのではないのでしょうか。

上述した大学教育研究フォーラムのテーマ変遷で言えば、近年求められる重点的トピックの変化に応じて自己の変革を重ねる過程で、初期に掲げていた根本的で大きな問題設定を見失わずに追求し続けるということになるのでしょうか。私たちにも突きつけられている難題と言えます。

Contents

- | | | | |
|---|---------------------------------|---|-------------------------------------|
| 1 | FDの不易と流行 | 5 | 教育支援センターにおける学習相談について |
| 2 | 2020年度 遠隔授業における実践事例報告 | 6 | 2021年度 新入生なんでも相談窓口「アスクカウンター」実施報告 |
| 3 | 2020年度 第3回FD研修会 開催報告 | 7 | オンライン授業における聴覚障がい学生への情報保障について |
| 4 | 2021年度 第1回及び第2回新任教員対象FD研修会 開催報告 | 8 | 2021年度「教育改善のための学生による授業アンケート」実施のお知らせ |



2020年度 遠隔授業における実践事例報告

2020年度遠隔授業における実践事例報告(遠隔授業での工夫、苦勞したこと、学生の反応等)として、今回は講義、実験実習科目について2名の先生に寄稿いただきました。

「民事訴訟法Ⅰ・Ⅱ」での遠隔授業実施報告

法学部教授 中村 壽宏

昨年度に引き続き、教育支援センターの副所長を務めさせて頂いております法学部の中村壽宏です。今年度もよろしくお願いたします。

2020年度の授業運営は、ほぼすべての教員にとって、極寒のあるいは灼熱の未踏の大地を踏みしめて進むが如く、難行苦行の連続であったと思われる。ICTを活用した授業運営を20年近く研究してきた私にとっても、全授業を遠隔で実施するのは初めてであり、それなりのスキルと経験値を積んできたと自信を持って臨んだのですが、10週目を越えたあたりから「これは相当キツイ」と感じるようになりました。みなさま本当におつかれさまでした(そして現在進行的に「おつかれさまです」)。

私の主要な講義科目は「民事訴訟法Ⅰ・Ⅱ」という3年次以上配当科目で、200名強の履修者に対してZoomミーティングの方法で授業を実施しました。すべての過程をインターネットとICTを活用する必要があったため、1コマの内容は次のように構成しました。

まず、授業日の一週間前に「レジュメ」「予習動画」「直感クイズ」の3点セットをLMSに登録して学生に公開しました。「予習動画」は、授業の内容のうち基礎的な部分をまとめたPPTファイルに合成音声による解説文の読み上げ音声を付したもので、学生はこれを視聴することにより当該授業回の学習到達目標や基本的な用語・概念の説明などを授業開始前に把握することができます。「直感クイズ」は、当該授業回で取り扱う法律上の論点を、「まだ何も教わっていない状態」のまま学生に直感で回答させるものです。正解なら自分の直感に自信をもってもらい、不正解なら自分の感覚と法律の実際のズレに軽くショックを受けてもらい、そしてなぜズレたのかを授業内で理解することで「ショック体験+理解」という組み合わせで学修効果を高めることを意図しています。

Zoomミーティングで授業を行ったあとは、さらに一週間の期間内に簡単な「復習テスト」(簡単な5択問題を5問)を受験させ、ここで1コマの授業は完結となります。

「予習動画」と「復習テスト」は平常点となることを予告しておいたので、すべてやり逃げた者が78.5%、1回分だけさぼってしまった者を含めると83.4%に達しました。

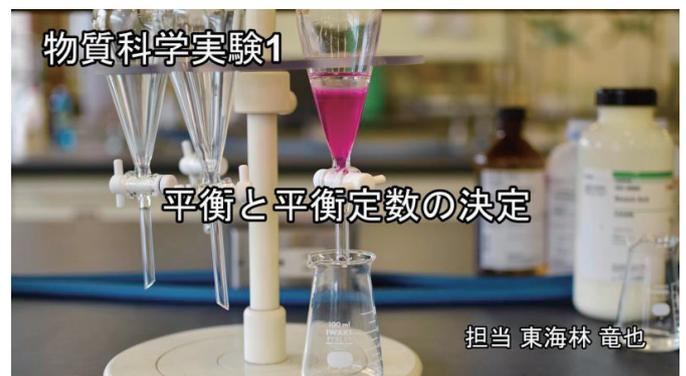
今年度もほぼ同じ流れで授業をしています。

化学は料理 —化学実験における遠隔授業の工夫—

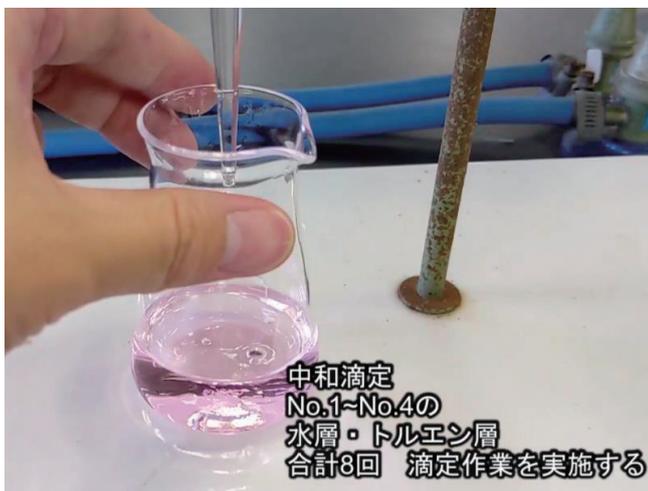
理学部化学科准教授 東海林 竜也

インターネットには、動画で工程を紹介する料理レシピサイトがある。実際にやってみると動画のように手際よく調理できなければ、味は果たしてレシピ通りなのか疑問になる、そんな経験はないだろうか? 標題の「化学は料理」は、今から20年近く前、私が高専生時代に恩師から授かった(?)言葉である。念のため付記すると、現在で言う分子ガストロノミーを予見して言ったわけではない(と思う)。化学の実験技術には繊細な手技が要求され、また日々鍛錬せねばそれは衰えてしまうことを料理になぞらえて発言した——のだと思う。当時は妙に納得して真意を聞き忘れたが、化学実験は食塩1粒レベルで薬品を量りとりたり、正確に指定量の溶液を移したりと繊細な手さばきが求められる。また、長い間実験しないと技術は衰える。そのため、2020年度の遠隔授業への切り替えは、本当に頭を悩ませる問題であった。

私は理学部化学科3年次の必修科目である物質科学実験Ⅰを一部担当している。実験科目において、学生は学習した原理や操作を実験ノートにまとめ、頭と手を使い実験操作を覚え、経過観察をノートに記し、得られた結果を解析し、最後にはレポートを作成する。この一連の過程は、対面授業で最も教育効果を発揮すると2021年度の対面授業の再開に伴い強く再認識した。それを踏まえ、2020年度に実施した遠隔授業内容について報告する。



担当する実験テーマを対面授業で行うと、学生は約3~4時間実験する。これをそのまま遠隔授業に持ち込む、つまり私が実験する様子を録画・配信する方法では、よほどの大作映画でもなければ飽きられる。そこで、遠隔授業ではオンデマンドとオンタイムのハイブリッド型で行うことにした。オンデマンドでは、私が行った実験動画をAdobe Premiereを用いて編集し、実験操作を短時間で理解できるように工夫した。



オンタイム授業では、実験の原理や演習問題、応用事例などを講義し、実験テーマの基礎知識の習得を図った。学生には、実験動画を視聴しオンタイム授業の内容を踏まえて、実験レポートの提出を課した。その際に、実験内容や基礎知識の理解度チェックにMicrosoft Formsを使い、クイズを出題した。オンタイム授業の内容は後日、Microsoft Streamにてオンデマンド配信した。学生から動画を繰り返し視聴できたため理解が深まったとありがたい感想を頂いた。

現在、遠隔授業の教材は動画やテキストに限定されるため、化学実験と相性は決して良くない。もし、研究が進められているVR、AR(仮想現実、拡張現実)技術を用いた仮想化学実験技術が発展すれば、誰もが自宅にいながら実験操作をシミュレーションできる日も訪れるであろう。



2020年度 第3回 FD 研修会 開催報告

- **開催日時**：2021年3月25日(木) 15:00～16:30(質疑応答を含む)
- **開催方法**：Zoomミーティング方式(Web会議システム)
- **開催目的**：2021年度神奈川大学の授業実施の基本方針において、前学期は「新型コロナウイルス感染症防止対策を継続しながら、可能な限り面接(対面)授業を実施する」としていることから、遠隔授業実施対策本部がこの基本方針に基づいて、「遠隔授業詳細マニュアル(Ver.2.00)ーオンデマンド授業とハイフレックス型授業を理解するー」を作成した。これを基にハイブリッドな授業運営(ハイフレックス型授業)を中心に教職員の理解を促す。
- **共 催**：遠隔授業対策本部、メディア教育・情報システムセンター、教育支援センター
- **講 師**：神奈川大学教育支援センター副所長
神奈川大学メディア教育・情報システム委員会委員 中村 壽宏(法学部教授)
- **対 象 者**：神奈川大学教職員
- **出 席 者**：257名(教員250名、職員7名) ※録画を行い、開催後に学内のみ動画公開

今回のFD研修会では、「遠隔授業詳細マニュアル(Ver.2.00)ーオンデマンド授業とハイフレックス型授業を理解するー(本学作成)」に沿って、「遠隔授業」、「面接(対面)授業」それぞれの形式の授業実施の方法について解説がされました。「遠隔授業」の形式で行う授業では可能な限り「オンデマンド型授業(遠隔授業)」とし、「面接(対面)授業」の形式で行う授業では、基礎疾患などにより学生から要配慮依頼書の提出があった場合、原則として「遠隔での授業実施を組み合わせたハイブリッドな授業運営(ハイフレックス型授業)」を実施することになるとしました。(面接(対面)授業においてハイフレックス型での対応をする必要がない授業科目に

についても示されました)。それぞれの理由として、①学生が時間割で指定されたコマに縛られずに各授業回の学修を行う方法を整えるため(例:学生が同日の近接した授業コマにて「遠隔授業」と「面接(対面)授業」を履修しなければならない場面を想定した措置)、②要配慮学生(基礎疾患等)に対する合理的な配慮などが挙げられました。また2021年度にはLMS(学習管理システム)が「dotCampus」から「WebClass」へ変更となること、またZoomミーティングの基本的な操作及び活用方法(録画ファイル公開、教室内の授業の様子をZoomミーティングルームにて同時に教室外に配信する方法等)の説明がありました。



2021年度 第1回及び第2回 新任教員対象FD研修会 開催報告

新任教員を対象に、本学における教育の質保証及びその一層の向上を図ることを目的とし、本学の建学の精神及び教育理念並びに各種方針をはじめとする教育に関する基本方針等を理解することにより、教育活動を円滑に開始できるよう、「2021年度 第1回及び第2回 新任教員対象FD研修会」を開催しました。今年度ははじめてオンデマンド研修等、新たな取組を実施しました。

【第1回】

実施方法：オンデマンド研修

動画公開期間：2021年4月1日(木)～15日(木)

プログラム

(1) 神奈川大学の基本方針等及び学修進路について

講師：副学長 山本 博史

(主な内容)

- 神奈川大学の基本方針 ● 神奈川大学の目的・理念
- 将来構想実行計画 重点事項
- 新キャンパス及び新学部構想
- 認証評価及び自己点検・評価 ● 内部質保証の方針
- 基本方針(3つのポリシー) ● 各種方針
- 研究倫理及び研究支援 ● 学修・進路
- 共通教養系科目(FYS、外国語科目、共通テーマ科目等)
- 成績評価 ● 進路(就職等) ● 高大連携事業

(2) FD活動及び学生支援について

講師：教育支援センター所長 高城 玲

(主な内容)

- FD活動とその推進体制 ● 教育力向上による教育の質保証
- 横浜市内4大学FD活動連携包括協定
- 入学前教育課題 ● 授業アンケート
- 学習相談 ● 障がいのある学生支援

【第2回】

開催日時：2021年5月26日(水) 15:00～17:30

(質疑応答を含む)

開催方法：Zoomミーティング方式(Web会議システム)

主催：教育支援センター

※本FD研修会は録画を行い、開催後に新任教員対象の先生方にのみ、動画公開

プログラム 講演

(1) 本学の研究費について

：研究支援部研究支援課長 風間 優子

本学の研究活動に係る不正行為防止、研究倫理綱領の説明があった。次に学内資金、外部資金、研究支援部分担表、研究支援体制の説明があり、本学の研究活動におけるルール理解への協力依頼があった。

(2) 本学の学修について

：教務部副部長(国際日本学部教授) 岩畑 貴弘

専任教員の三大職務(授業・学務・研究)を行うための基本的な考えについて、本学の授業運営に関すること(学期・授業時間、学年暦、シラバス・履修要覧・履修登録(学内システム含む)、出欠管理、授業アンケート)を岩畑教授の経験を交えて説明があった。次に成績評価に関すること(試験・採点・評価)について説明があり、その他にハラスメント、災害時等の臨時休講、コロナ禍の遠隔授業について説明があった。最後に、岩畑教授から「昨今の大学生は大学で学ぶべき・学んだ方が良いと思うか。それは何故か?」という問題提起がされた。参加者からは「自分の頭で若い時にいろんな知識・意見・人に触れることが重要であるため」、「若い時に純粋な思考で個性を磨き、分野を横断した知識が大学で学べる」と回答があり、新任教員が本学の学修を考える好機となった。

(3) TA・SAについて

：教育支援センター 山口 諒

TA・SAの概要、本学における実施、運営目的、運営実績、活用事例、使用にあたっての注意事項の説明があった。

本学における授業、研究活動の基本的な考え方について、新任教員の理解がより一層深まること、そして今後も本研修会を充実させ本学のFD活動の発展に寄与できることを目指し、教育支援センターでは継続的なFD活動を実施いたします。



教育支援センターにおける学習相談について

教育支援センターでは、2012年度の開設から大学での学修に必要な基礎学力を補い、さらに意欲的、主体的に自分の力を伸ばしたいと考えている学生を支援するために学習相談を行っています。

対象科目は英語・数学・文章表現の3科目で、学習指導の知識及び経験を有する元高等学校教諭の学習相談員が、個別相談を通し学修をサポートします。

2020年度は新型コロナウイルス感染症防止対策による入構制限に伴い、後学期の10月～12月にZoomを用いたオンラインのみの対応で学習相談を実施しました。大学に来ることができない学生の相談の場として、多くの学生が利用しました。

2020年10月～2020年12月 学習相談件数

キャンパス	1年	2年	3年	4年	合計
横浜キャンパス	11	5	8	29	53
湘南ひらつかキャンパス	9	10	0	13	32
合計	20	15	8	42	85

学習相談を利用する学生の相談例

- ・英語…TOEIC®、英検、基礎学習（リスニング、基本文法）
- ・数学…数検、数的処理
- ・文章表現…授業課題（レポート）添削、読解

また、2021年度はオンラインでの相談に加え、対面の相談も再開しました。特に「大学での学修の仕方が分からない」、「高校での基礎学習を今一度復習したい」、「TOEIC®や検定、就職活動のためにさらに学習力を向上させたい」と考えている方が利用しています。

利用案内

- 期 間…授業開講期間 月曜日～金曜日
- 時間・場所…横浜キャンパス（3号館1階）：12:40～17:50
湘南ひらつかキャンパス（8号館）：11:50～16:50
みなとみらいキャンパス（2階学習相談室/受付：教務課）：12:40～17:50
- 受取方法…対面/遠隔
- 予約方法…教育支援センター/教務課（みなとみらい）窓口
本学ホームページ内（学習相談ページ）記載のメールアドレスより

学習相談室の開室日時（キャンパスごとの相談受付科目・日時（時間割）・相談員）

※みなとみらいキャンパスで数学を希望する場合は他キャンパスの時間帯にオンラインでの相談が可能

横浜キャンパス

曜日	科目	担当
月	英語	澤田
	文章表現	阪井田
火	英語	田中(礼)
	数学	田中(義)
	文章表現	阪井田
水	英語	澤田
	数学	田中(義)
木	数学	西
	文章表現	伊東
金	英語	澤田
	数学	西

湘南ひらつかキャンパス

曜日	科目	担当
月	数学	榎本
火	文章表現	兵頭
木	英語	川口
金	文章表現	兵頭

みなとみらいキャンパス

曜日	科目	担当
火	文章表現	伊東
水	英語	田中(礼)
木	英語	田中(礼)
金	文章表現	阪井田

横浜/みなとみらい	
①	12:40～13:30
②	13:30～14:20
③	14:20～15:10
④	15:20～16:10
⑤	16:10～17:00
⑥	17:00～17:50

湘南ひらつか	
①	11:50～12:40
②	12:40～13:30
③	13:30～14:20
④	14:20～15:10
⑤	15:10～16:00
⑥	16:00～16:50



※詳しくは本学ホームページ（学習相談ページ）（URL・QRコード）

https://www.kanagawa-u.ac.jp/campuslife/support/educational_supportcenter/

2021年度新入生なんでも相談窓口「アスクカウンター」実施報告

新入生なんでも相談窓口「アスクカウンター」を開催いたしました。学生UD^{※1}委員会(※1 University Development)主催のこの活動は2014年度より開始し、8年目を迎えます。

実施内容は、授業・履修及びサークル活動や大学生生活・資格や留学などについて、新入生の相談や疑問に対して先輩学生が体験談を交えて回答し、大学生活のスタートにあたってサポートを行っています。また、今回は新型コロナウイルスの影響により中止となった昨年度の経緯を踏まえ、感染防止策の徹底した対面相談とZoomを使用したオンライン相談を併用したハイブリッド型とし、本学の状況に沿った運営としました。

運営スタッフにつきましては、学生UD委員会と有志学生での協同運営となり、学科や学年を超えたスタッフ同士の交流という面でも効果を発揮しています。集まった有志学生の中には「自身が新入生のときにアスクカウンターを利用して、とてもありがたかったため、今度はスタッフとして協力したい」といった学生が多数おり、継続した実施によって学生間で良い循環を生んでいることがわかりました。アスクカウンターは学修支援、ピア・

サポートの観点からも実施の必要性が求められるイベントとなっています。

実施の様子としては、笑い声も聞こえるような和やかな雰囲気で行われ、相談した学生も明るい表情で会場を後にしていました。特に、履修の相談やオンライン授業に関する質問が多く運営側の学生も苦勞をしていましたが、それぞれ工夫を行いながら回答し、相談学生の不安解消につなげた結果であると言えます。学生への実施後のアンケート結果より抜粋した「参加した新入生の声」「運営スタッフからの声」からも満足度の高さが伺えます。また、会場での相談には新入生だけでなく、2年生以上からの相談も見られ、昨年度からのコロナ禍による不安解消としても役立っていたことがわかりました。

最後に、今年度はコロナ禍による不安定な情勢の中での実施となりましたが、学生UD委員会や有志学生が協力し、新年度開始のサポートを行うことができました。今後もこのような活動を通して、学生の支援・交流の場の提供を行っていききたいと思います。

(教育支援センター 山口 諒)

【参加した新入生の声】

- 親切で丁寧に説明いただき、助かりました。ありがとうございました。
- 入学したばかりで緊張と不安がありましたが、先輩方のおかげで和らぎ、楽しく大学生活のスタートが切れました。

【運営スタッフ学生の声】

- 不安そうな顔で相談を始めた学生が終わるころには笑顔になり、対応にとっても感謝してくれたことがうれしかった。
- 新入生からのニーズも高いため、周知を強化し、今後も継続して活動していきたいと改めて感じた。

開設期間: 4月2日(金)～9日(金) ※土日除く
各日 10:00～16:00

開設場所:【 横 浜 】8号館2階マップホール
【湘南ひらつか】11号館サーカムホール ホワイエ
【みなとみらい】4階 ラーニングcommons

主 催: 学生UD委員会
(協力: 教育支援センター・教務課(みなとみらい))

運 営: 学生UD委員会・有志学生

運営者・参加者数:

【 横 浜 】	運営学生 30名	参加者 298名(延べ)	アンケート回答者 240名
【湘南ひらつか】	運営学生 15名	参加者 125名(延べ)	アンケート回答者 94名
【みなとみらい】	運営学生 19名	参加者 587名(延べ)	アンケート回答者 103名





オンライン授業における聴覚障がい学生への情報保障について

新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、2020年度の授業は一斉にオンライン授業に切り替わりました。多くの教職員・学生にとって突然のオンライン授業への対応は困難なものでしたが、障がい学生支援を担当する教育支援センターとしてもオンライン授業での支援方法・サポート体制を早急に検討・構築することは容易ではありませんでした。今回のFDニュースレターでは、神奈川大学でのオンライン授業における障がい学生支援の取り組みのうち、聴覚障がい学生への情報保障についてご紹介します。

オンライン授業での障がい学生支援においては、通学などの移動がないため肢体不自由の学生にとってはメリットもある一方で、視覚障がい・聴覚障がいを持つ学生に対しては面接(対面)授業と同じ方法で情報保障を行うことが難しいといわれています。特に、重い聴覚障がいを持つ学生への支援として、本学でも2019年度までの面接(対面)授業ではノートテイクを隣の席に配置して要約筆記を行っていましたが、オンライン授業ではこれができません。オンデマンド授業であれば動画に字幕を付けることで情報保障ができますが、Zoomなどのオンタイムで実施される授業に対してはノートテイクによるリアルタイムでの情報保障が必要です。

そこで、教育支援センターでは以前より聴覚障がい学生への支援で使用していた「UDトーク®」という音声認識アプリを活用した情報保障を行うこととしました。UDトークは、話した言葉をその場で文字化することが可能となり、授業で教員が話す内容を聴覚障がい学生もほとんどタイムラグなく読むことができます。ただし、UDトークでも一言一句を完璧に文字化することはできません。大学教育においては、多くの専門用語が扱われ、いろいろな話し方の先生がいることから、思ったように変換されないことも多くあります。そこで、ノートテイクによるUDトークの誤字修正を行いました。UDトークは音声認識した文字をオ

ンライン上でタイピングで修正することができるため、ノートテイクの学生は家からでも支援することが可能です。ノートテイクの学生はZoomのオンライン授業に参加し、授業を聞きながら、UDトークの誤字をその場で変換する、という流れです。この方法により、オンライン授業でも聴覚障がいを持つ学生への支援を行うことができました。

ただし、この支援方法も万能ではなく課題もあります。ノートテイクのタイピングの技術を要することや、通信環境によってZoomの授業音声が不安定になること、先生の話し方によっては誤変換が多くなること、要約筆記よりも文字情報が圧倒的に多くなるため聴覚障がい学生にとっては必要な情報を瞬時に読み取ることが難しいことなど、合理的配慮の提供は一朝一夕では実現できません。ノートテイクなど授業サポーターの育成をはじめ、大学によるオンライン授業の安定した環境整備、教員の話し方の工夫など、改善すべき点は多くあり、UDトークをはじめとするICTツールを頼ることで、障がい学生支援は実現しないことに改めて気付かされました。

最後に、2021年度も引き続きオンライン授業が多く実施されている中で、UDトークを活用した情報保障も継続しています。ノートテイクの学生にとってもコロナ禍で不安定な大学生活にもかかわらず、2020年度から引き続き多くの本学の学生がノートテイクとして協力してくれることは、本学にとって誇らしいことだと感じます。

(教育支援センター 佐野恭平)



UDトークで音声認識した文字のイメージ。
ノートテイクが修正した箇所は赤字で表示される。



2021年度 「教育改善のための学生による授業アンケート」実施のお知らせ

神奈川大学では授業改善に向けた取り組みとして、「教育改善のための学生による授業アンケート」を実施しており、2021年度からはウェブシステムを導入して実施します。

本アンケートは、全学的な組織的教育改善に向けたFD活動として位置付けており、学生の授業に対する取り組みや捉え方を理解する資料を収集し、各々の教員及び組織に授業を改善する機会を提供することを目的としています。

従来のマークシート方式からウェブ方式に変更することで、講義や実験・実習などの授業形態のほか、面接(対面)授業や遠隔授業などの多様な授業実施方法を問わずに学生による授業アンケートが可能となります。そして、回答結果の迅速なフィードバックを通じて更なる授業改善につながることが期待されます。

学生・教員の皆さまにおかれましては、授業アンケートへの回答・実施にご協力くださいますようお願い申し上げます。

2021は

前学期 7月2日(金)～8日(木)

集中講義 8月17日(火)～9月24日(金)

後学期 12月20日(月)～1月22日(土)

で実施を予定しています。



FDニュースレターへの寄稿をお願いします

本ニュースレターは、FD活動に対する啓発を促進するため、学部・研究科FD委員会及び個々の教職員の教育改善や教育支援に対する取組事例を紹介し、本学FDの定義にある「教員の自主的・自律的な日常的な教育改善を支援すること」を目的としています。教育改善(支援)に関する研究及び問題提起、授業におけるユニークな実践事例など教育職員、事務職員等を問わず、皆様からのご寄稿を募集しています。

【内容】 FD(ファカルティ・ディベロップメント)、SD(スタッフ・ディベロップメント)に関するもの

【字数】 1,000～2,000字(応相談) **【写真等】** 掲載可(応相談)

【提出先】 FD・学生支援推進委員会(事務局:教育支援センター) 内線 2165、2166

e-mail: kanagawa-fd@kanagawa-u.ac.jp

2021年度FD・学生支援推進委員会委員

〔委員〕

委員長 高城 玲、副委員長 中村 壽宏、副委員長・工学部 石井 信明、法学部 井上 匡子、経済学部 森田 圭亮、経営学部 嶋谷 誠司、外国語学部 新木 秀和、国際日本学部 大島 希巳江、人間科学部 衣笠 竜太、理学部 川東 健、学修進路支援委員会 岩畑 貴弘、学生生活支援委員会 馬谷 誠二、メディア教育・情報システム委員会 村山 宏幸、入試管理委員会 長澤 倫康、大学院学務委員会 篠森 大輔、共通教養教育推進委員会 村井 寛志、法学部 小山 竜司、教育支援センター事務部長 梅香家 睦子(以上18名)

〔オブザーバー〕

学長室 是友 めぐみ、教務部 能重 幸夫、学生生活支援部 高橋 厚、情報システム推進部 村山 宏幸、入試センター 吉岡 誠、経営政策部 西川 朋実(以上6名)

〔事務局:教育支援センター〕

升田 亘、天利 百合、佐野 恭平、榎山 翔太、藤本 隆寛、山口 諒、堀江 美奈子(以上7名)

ご意見、ご質問等がございましたら、お気軽にお寄せください。 E-mail kanagawa-fd@kanagawa-u.ac.jp